

ひとり旅

串田孫一





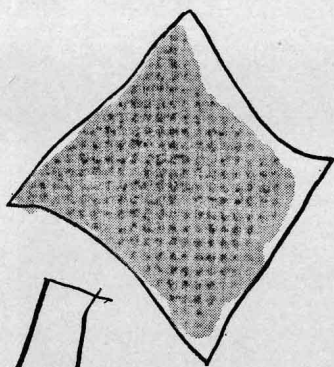
◇ひとり旅◇定価四八〇円◇昭和四三年六月二〇日印刷◇
◇昭和四三年六月二五日発行◇編集兼発行人・小田乾三◇
◇印刷所・交通印刷株式会社◇発行所・日本交通公社◇
◇東京都千代田区丸ノ内一一一◇振替・東京二九四〇三◇

ひとり旅

串田系一

北海道

5～45ページ

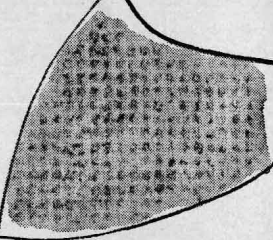


中部

115～187ページ

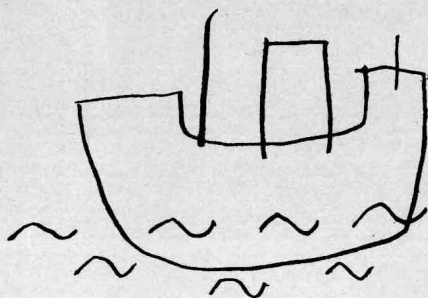
東北

49～83ページ



関東

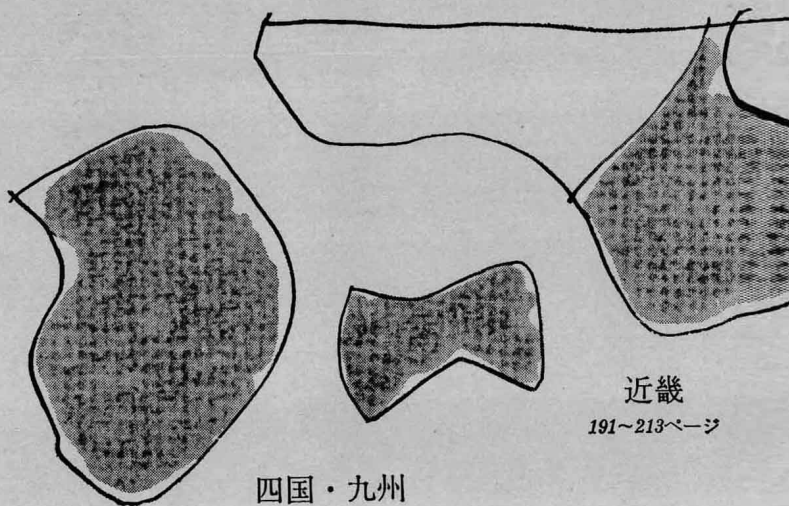
87～111ページ



七十五冊ほど旅の画帖がたまつたので、気ままに取り出して、しばらく回想にふけてみようと思います。一九五一年以降のものです。それ以前の旅の絵や覚書は焼けてしまいました。大体私は山旅が多いのですが、ここには控え目に入れることにしました。忘れていた旅先のことを想い出して、ひとりで楽しい気分になりましたが、悦んでいただけるでしょうか。

山陽・山陰

217～251ページ



近畿

191～213ページ

四国・九州

255～293ページ

—— 閑 想 ——

旅の寂しさ	46
心の旅仕度	112
木々の営み	188
旅の宿の朝	252

ジャケット
口絵・挿絵 } 串田孫一
題字・カット }
写真 山本明

著者略歴

1915年11月12日 東京生れ。小・中学は暁星。

東京高校・東大文卒。上智大・国学院大・

東京外大などで25年間教師。現在は公職なし。

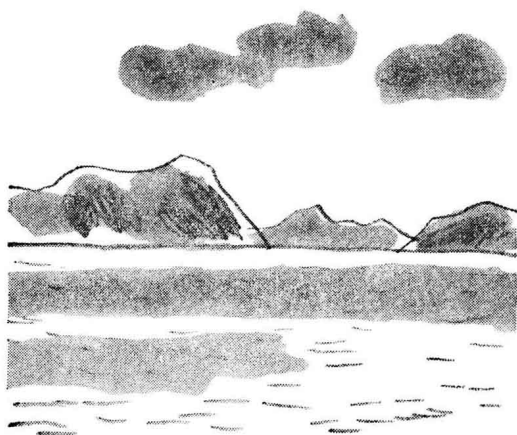
著書

雲と大地の歌 花嫁の越えた峠 いろいろの天使

随想集八巻 断想集三巻 著作集六巻

北海道

ノシャップ岬	6	樽 前 山	26
鬼 志 別	8	阿 寒	28
クッチャロ湖	10	美 幌 峠	30
紋 別	12	斜 里 岳	32
サロベツ原野	14	落 部	34
富 良 野	16	塩 谷 海 岸	36
十 勝 岳	18	ニセコアンヌプリ	38
有 珠 岳	20	駒 ケ 岳	40
昭 和 新 山	22	砂 原	42
支 笏 湖	24	函 館	44





ノシャップ岬

私の冬の旅の、ここが辿りついたところである。稚内の駅を出ると、街は吹雪だったが、私は誰も歩いていない道を北へと歩いた。そして遂に地の果へやって来た自分の心だけは凍らせないように、何か一つの塊りになったような気分で歩いた。

吹雪は十五分か二十分おきに息をついた。空もその時は多彩な雲が散らばり、凍る海辺が^{きらめ}くようだった。

目の前に、ブルー・ブラックの海がひろがり、強い風が吹き続けているのに、波は立っていなかった。波はもっと沖で崩れ、小さいうねりに変って浅瀬を寄せて来るのだった。

黒い大きい雲塊が日本海をやって来る。



2nd 45,

20 DEC. 1960

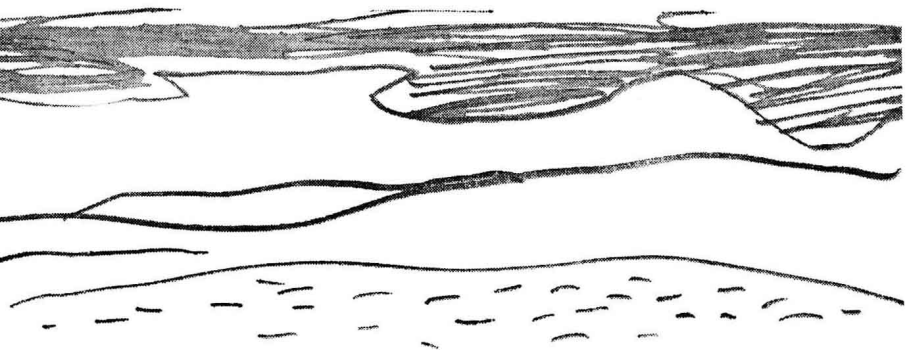
世界は色彩を失い、幾度もなだれ込むように吹雪がやって来る。私は小さい舟のかげにかくれ、手袋で顔をおさえながら、息をやっとつく。

だが私は大きな満足を味う。想像して来た以上の気温の低さと、厳しい風がその満足を一層大きなものにした。もしここで私の力を抜いたら、ほんの二、三分で凍ってしまうかも知れない。顔を叩き、体を叩き、風のあい間に足踏みをする。これを怠れば私は氷塊となって、北の海へと飛ばされてしまうだろう。

夕暮れは早く、再び凍る道を、今度は風を背にして稚内の町へ戻った。町にはもう灯がついていた。犬が橇を牽いていた。

灯のついた一軒の家の中でかすかにオルガンの音がしていた。

一九六〇年十二月二〇日



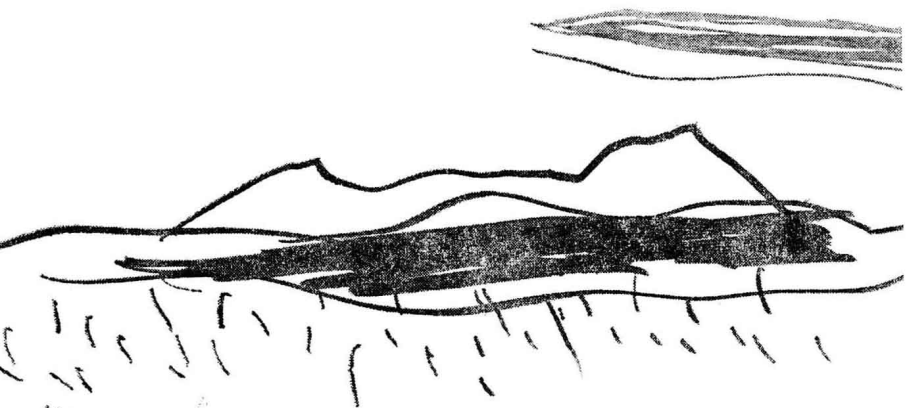
鬼志別 おにしべつ

音威子府おといねつぷから山が迫って景色は刻々変る。山の名前は敏音知岳びんおしり、ポロヌプリ、珠文岳。この同じ山々を二年半前の冬に見ているが、その時には雪をたっぷりとし山肌につけて、七、八百メートルの山とは思えなかった。それが、今見れば、それほど驚くには足らない緑の山になっていた。

冬のクツチャロ湖は殆んどが雪の下になって、雪原と変りなかったが、今は空の青さを湖面にうつし、それが光となって小波のあいだで遊んでいる。

これから稚内までは私の好きな地形である。オホーツク海は見えない。だが僅かの台地の向うにそれを感じる。

猿払さるふちのあたりにひろがる原野もすばらしい。その西にはトキタイ山、ポロシリ、エタンバックというちょっと外国の山の名かと思うような、高さは四百メートル内外



遠く山ハ文珠岳、右、湖ハクナヤロ湖

のものがある。それは北へ向って一層低く、もう殆んど丘陵に過ぎないようなものになると、その裏手から、鋭い形の山がのぞいている。利尻であるが、あいだの海がこちら側からでは全然見えないので、不思議な眺めである。

車窓の近くの丘には笹がそろそろ青味を帯び枯木が何かを語り、何かを訴えようとしている。丘のあいだを小川が流れ、その周辺には水芭蕉が花を咲かせている。

鬼志別。これも忘れがたい地名である。しかしそうは言っても、急行はこの駅を通過してしまうので、途中下車をするのには、普通列車を選んで来なければならぬ。

ここから宗谷岬を海岸線に沿ってまわることがいいかどうか、それは分らない。ただ寂しさが風にとけ込んでいるに違いないこのあたりの笹の丘陵を私は歩きたい。

一九六二年五月二二日



fig 20 DEC. 60

クツチャロ湖

これは、普通、屈斜路湖と書かれる大きい湖ではなく、それよりずっと北の、浜頓別の近くのもの。クツチャロ沼になっている地図もある。

中頓別あたりから雪がやみ、青空が出て、浜頓別では日が照り出したので、この湖か、あるいは沼の向うにずらりと並んだ山なみが、いやに立派に見える。大して高い山ではないが、存分に雪をかぶっているので、輝き方がどうしたって一級品である。

湖の水はもうずっと凍りっぱなしで、その上に雪が積っているのので、原野と湖との区別はつかない。それでもところどころに、雪原とはいくらか色



KUCCHARO-KO (Près de Hakanto mtr)

の違った氷が見えている。

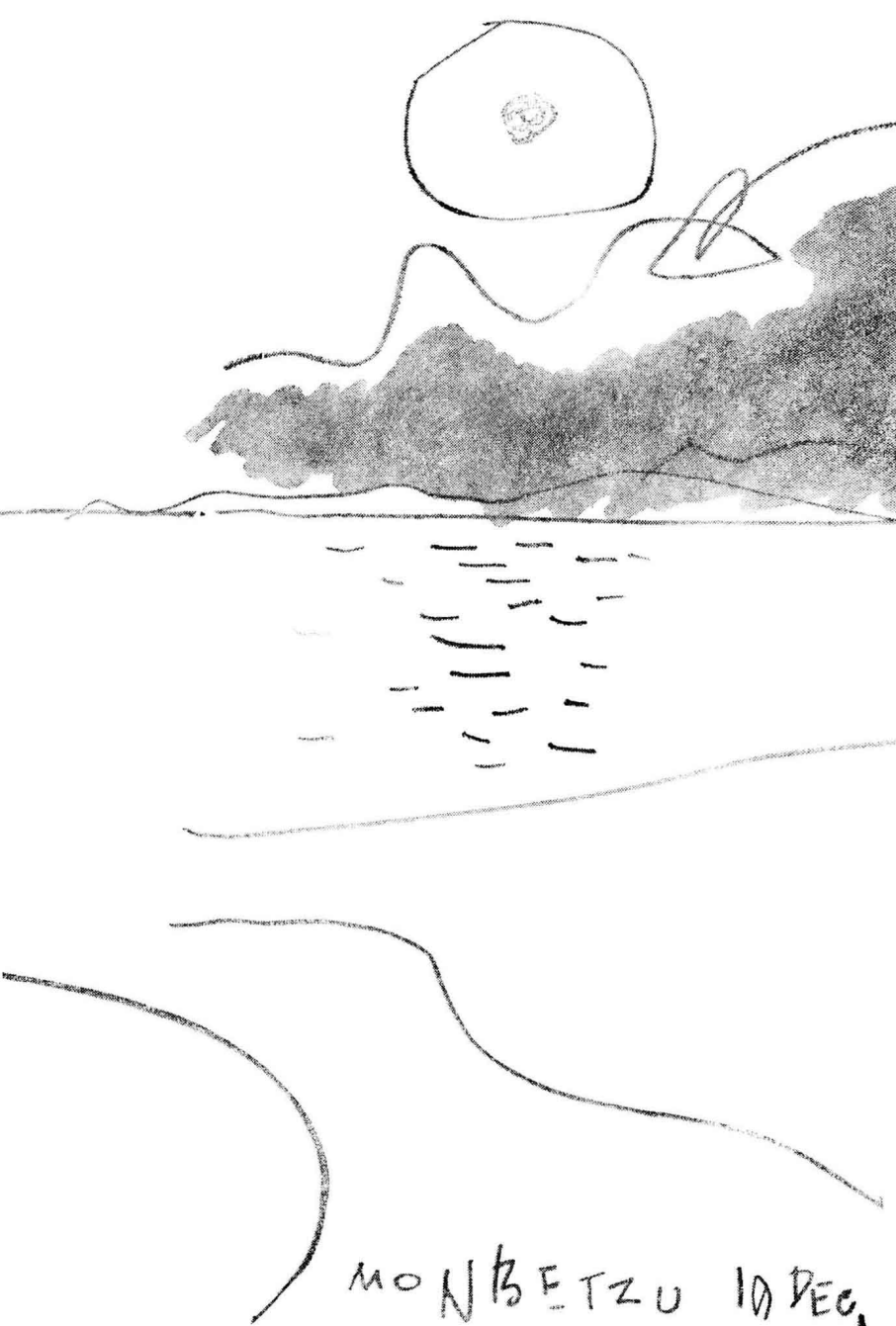
画帖がなくなれば、稚内でさがせるだろうと思ったので、せっせと絵を描く。列車の窓ガラスがすぐに曇ってしまうので、始末が悪いし、忙しい。

北へと向うに従って、天気がよくなるので、私の気持は時々戸惑うけれど、雪が降り続けていて何も見えなかったら、腕を組んで眠ってしまったかも知れない。

豪華な輝きを見せている山の向うには、灰色に紫をにじませた雲が群っているのです、この天気は海岸に近いところだけのだろう。

何だか私の気持はひどく落ちつかない。ここはもう北海道のうちでも、ずっと北なのだと自分に言いかけせる。

一九六〇年二月二〇日



MONBETZU 10 DEC.

紋別

湧網線ゆうもうせんの、もうかなりおそい列車で、中湧別なかつゆべつまで来ると、紋別へ行くバスがもう一本出るところだった。バスに乗っているのは私一人。ラジオがバッハのカンタータをやっている。もうクリスマスが近付いているのだと思った。

外は雪が降り、風が時々その雪を舞い上げる。

紋別で、宿を断わられて少々あわてたが二軒目の宿は親切にしてくれた。その宿を朝早く出て港へ行ってみると、夜はすっかりあけているのに人影がない。防波堤の横に並んでいる漁船には昨夜の雪が積っている。海は凍ってはいなかった。

飢えている容子の鳥が、杭にとまっている。杭に近寄っても鳥は逃げない。港から海岸を歩く。足先の感覚は歩いても走ってもなかなか戻って来ない。

太陽が雪雲の上に出る。すると、港も浜辺も輝きはじめる。しかし、この太陽の光も暖かさをくれない。一層冷たくなるようだった。オホーツク海の水平線には、昨年の雪雲が去って行くのが見える。雲のうしろ姿であった。

九時になった時に、港の事務所の屋根から「新世界」が流れた。

一九六〇年十二月一九日



サロベツ原野

礼文島から戻って稚内へ来ると、急に肉が食べたくなつたが、食堂などに落ちついている時間もなかつたので、コーンビーフの罐詰とバターと食パンを買つて列車に乗り、膝の上にそれらをひろげて、がつがつ食べていた。西側の窓際に席をとつたのは、サロベツ原野を眺めるためだった。たつた二輛連結の気動車だったが、席はまだいくらかあいていた。

拔海、勇知、かぶと沼という駅を過ぎると、そろそろ原野のひろがりが大きくなる。雲の工合も大変にいい。頭上から重なり合つた雲が地平線近くなつて終り、その境がはっきりしていた。

上サロベツ、下サロベツと地図の上で



SAROBETZU GENYA

は分れているが、車窓からはそれが分らない。遠くで光っているのはペンケ沼とパンケ沼。さらに海岸線近くにはまだ沼は幾らも並んでいる筈だが、それは、途中の僅かの起伏にさえぎられて見えない。

その見えない海岸を私は見たいと思う。天塩までの、ざっと六〇キロのまっすぐの海岸を、二日、また三日かかって歩くことが、私の夢として残る。

ほかに慾を出さず、サロベツ原野だけを訪ねる。そこに何があるか私は全く知らない。原野での、天幕を移動させながらの数日の滞在を、何としても実現させなければ……。

一九六二年五月二五日